

「大人が子どもの行動に
困ったときは」



我孫子市教育委員会

教育相談センター 遠藤美香

知識がない時の赤ちゃんの「泣き」のとらえ方



なんで泣くの

なにかの病気なの

ミルクを飲ませたばかりなのに

こっちが泣きたい



不安

知識を持って

気持ちを伝える手段としての「泣き」と
理解していると……

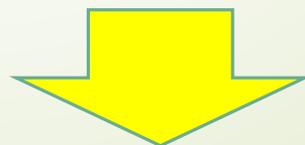


おなかがすいたのかな

おしりがぬれたのかな

暑いのかな、寒いのかな

どこか痛いのかな、甘えたい
のかな



赤ちゃんは泣くもの

知識を持って子育てすると いろいろなことが見えてきます!

子どもは大人を小型にしたものではない。身体的にも、認知や情緒面でもその能力が異なるし、長期間にわたり、大人の保護に依存しなければならないから。

この事実を考慮に入れて、子育てしていかないと結果、子どものこころを傷つけてしまうことになる。

大まかに正常発達を知っておきましょう!

発達のだ筋（成長は中から外へ）

- ▶ 新生児期
→ 原始反射
- ▶ 乳児期（2ヶ月～1歳半）
→ 動き始める2～3ヶ月 → お座り4～7ヶ月
→ ハイハイ8～12ヶ月
- ▶ 幼児期前期（1歳半～3歳）
→ 上手に歩く
- ▶ 幼児期後期（3歳～6歳）
→ 活動的になる

粗大な運動の発達

- ✓ 大人とほぼ同様な運動機能が身につく
- ✓ のは6歳ぐらい
- ✓ 首のすわり（3か月頃）
- ✓ 寝返り（4～6か月頃）
- ✓ おすわり・四つ這い（6～9か月頃）
- ✓ つかまり立ち・立位（9～12か月頃）
- ✓ 独歩（1歳頃）

粗大な運動の発達 2

2歳	両足とび
3歳	飛び降り
3歳半	片脚立ち階段交互昇降
5歳	スキップ
6歳	大人とほぼ同じ能力が備わる

手の発達

新生児：手は握っていることが多い

0～3か月：手が開き、手と口、
手と手が出会う時期

3～4か月：自分の手を見る、
手に触れた物をつかむ

4～6か月：腕を伸ばして物をつかみ、
手に持ったものを口に持って
いく

手の発達 2

7～9か月：目が手を誘導し、手の機能が
多様になる時期、両手遊び、
座位の安定

四つ這い移動、姿勢変換

10か月：小さなものを母指、示指でつまむ

1～2歳：手掌回外握り コップを持って
飲む

2～3歳：手掌回内握り

3～4歳：手指回外握り

4歳以降：3指握り

目（視覚）の発達 Ⅰ

誕生時は、不随意に眼球が動くことが多い

生後5～6週 見つめることをする

2か月 人などを目で追う

4か月 見たものに手を差し出す

5か月 見て、探索する

2歳 視力が0.5ぐらいになる

3歳 視力が0.6～0.7ぐらいになる

目（視覚）の発達 2

- 4歳 両眼視する機能がほぼ完成する
- 5歳 視力が1.0くらいになる
- 12歳 大人と同じ機能となる

耳（聴覚）の発達

0か月：突然の音にびくっとする

1か月：呼びかけに反応する

泣いているときに声をかけると泣き止む

2か月：話しかけると声を出して喜ぶ

音の方向に顔をむける

3か月：好ましい声に嬉しそうな顔をする

嫌な音や声を嫌がる

4か月：ベルの音に動作を止める

いろいろな音に興味を示す

ことばの発達

前言語期（0～1歳6か月）

2～10か月 喃語

1歳 初語（有意味語）

ことばの拡大期（1歳6か月～4歳）

1歳6か月過ぎ 2語文

2歳 第1質問期「これなに？」

3歳 第2質問期「なぜ、どうして？」

ことばの発達 2

ことばの充実期（4～6歳）

- ✓ 通常の生活に支障のきたさない程度の会話が可能
- ✓ こども同士のコミュニケーションの増加
- ✓ 「思考の道具」としての機能

現在、世界中の子育ての 課題となっているテーマは…。

- 子どもの共感性をどう育てるのか？
- 子どもの攻撃性をどうコントロールするのか？
- 他者への思いやりを取り戻すことは、世界全体の課題
 - 子どもに共感性の欠如と攻撃行動をもたらす→マルトリートメント→アタッチメントの不全

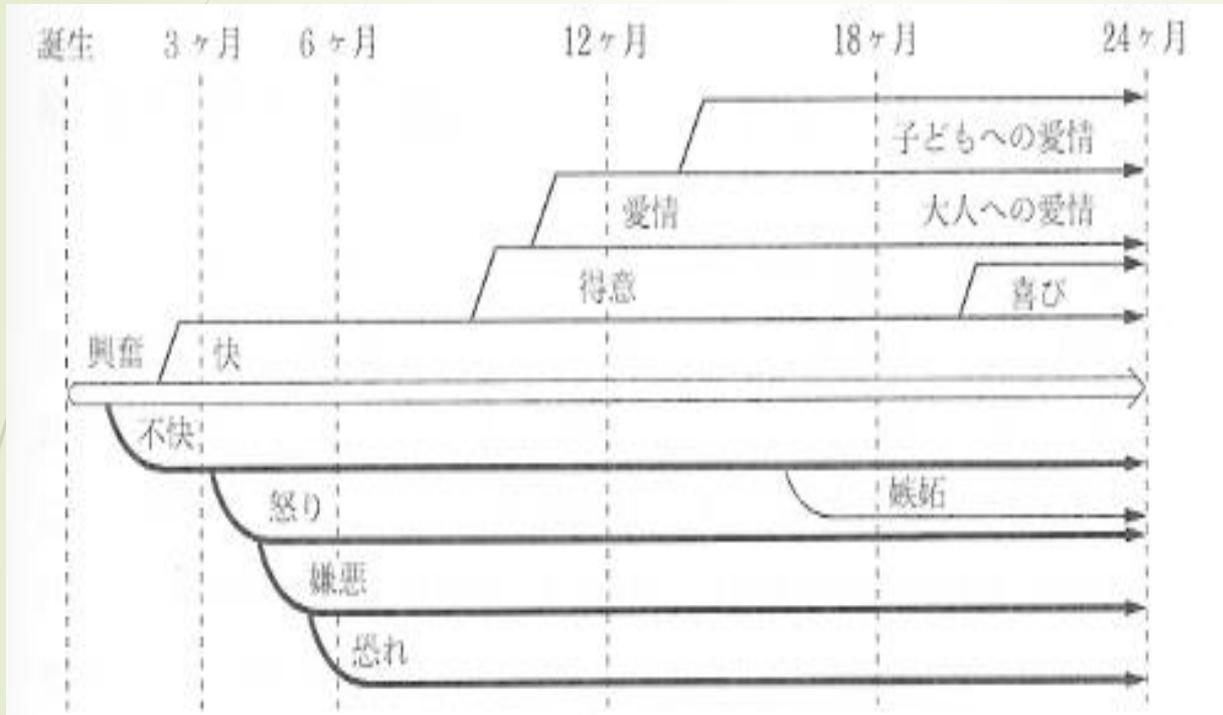


自己肯定感の欠如、自尊感情の欠如

心の発達

年齢	社会・心理的発達	必要事項・行動	心の発達
乳児期	信頼感	ふれあい、母子相互作用 サインに応える	アタッチメントの形成、 人に対する信頼感、肯定的人間像
幼児期前期	自律性の獲得	探索行動、しつけ、 第一反抗期	多数の肯定的人間像、社会生活の基本的決まりと自我の芽生え：親に愛されている、信頼されている親は絶対的味方、頼りになる
幼児期後期	自主性の獲得	母子分離、友達同士の自由な遊び、基本的行動、社会生活、・生活習慣、耐性の基本の獲得、コミュニケーションの手段としての言葉の発達	自己肯定感（自分が好き）、他人に対する思いやり、皆と一緒に楽しく遊べる、好奇心に応じていろいろな事に挑戦

子どもの感情の分化について



ブリッジエス(Bridges)1932年

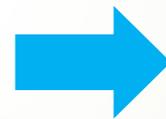
ひとは、2歳までに11種類の情緒が生まれ、5歳までには大人が持つ同じ17種類の情緒が全部そろふ(K. M. B. ブリッジエス)

どのように対応していますか？

- ▶ 感情のコントロールの未熟さから、気になる行動として見える困った行動に
否定的な対応をとると

➡ **子どもは納得いかず不安定に**

どうして
わかってくれ
ないの！！



親との
信頼関係が築けない

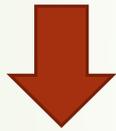
* 何度も同じことを繰り返し、悪循環に・・・
自分の思いを上手に表現できるように援助していく



自分の思いを上手に 表現するには？

➤感情のコントロールの形成

(感情をコントロールする力が発達していない)



- ## ➤未分化な感情を受け止め、吸収することによってインパクトをやわらげ、そのうえで子どもに、その感情状態を言語的に照らし返す

それでも治らない時

◆癇癢を起している子どもは、情緒的に錯乱した状態にある。よって、案外自分の激しい感情の理由が分からなくなっている。感情やその感情の原因を言葉で照らし返してあげることが、大変重要。

◆行動の修正

- ・人とのかかわりを楽しめるように、適切な人間関係のパターンを経験させ、学習させること。

- ・不適切な養育環境が普通と思っている子どもは、学校や学童、放課後デイサービス等など適切な環境に強い不安を感じてしまったり試し行動が出る時がある。⇒絶対同じ土俵に上がらない。怒らない。

乳幼児の心の発達

- ▶ アタッチメントとは
特定の大人への「なつき」
親は子どもにとってかけがえのない存在
- ▶ アタッチメントの形成過程
飛行場現象→子どもにとって愛着者は不安を鎮め、新たなエネルギーを供給する基地

「自己肯定感・自尊感情」とは？

- 自分にはできることもあるし、
できないこともある
- でも、できなくても、
自分には生きている価値がある
- 自分は自分として生きていていいんだ
- かけがえのない存在なんだ
と、思ってもらえること。

※「自信」とはちょっと違う

※自己肯定感・自尊感情が高いと？低いと？

「自己肯定感・自尊感情」を育てる 年齢は？

○自分が健康で生きていくための必要な
「生活習慣」

○人が共に生きていくための必要な
「社会的ルール・マナー」

これらは、大人が伝えていかななくてはなりません。それがいわゆる「しつけ」です。

※しつけは、こころの土台が育っていれば身につつきやすいです。

※何歳からでも育て直しはできます。

ほめ方の基本は・・・

「過程」をほめること！

○できたらほめるより

○やろうとしたらほめるを優先に

結果を評価<過程を認める

学校や社会に出たら結果が評価されるのは事実。でも、学校や社会と、家庭を同じにする必要ない。だから、自己肯定感と自尊心を家庭で育てておいて。

行動と対応について

親の気持ちと行動は・・・

期待をかける・
励まし

他人と比較・頑
張って欲しい

叱咤激励

結果に失望



子どもの気持ちは・・・

ちよつとこわ
いなあ

やめたいけ
ど・・・

お母さんイラ
イラしている

自分はダメな
子

行動と対応について

親の適切な行動は・・・

小さな目標を示す

少しの挑戦を大きくほめる

次の小さな目標を示す

「できたらほめる」を繰り返す



子どもの気持ちは・・・

それならできるかも

ほめてもらえてうれしい

それくらいなら出来る

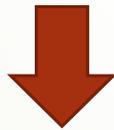
出来るんだ！
私ってすごい！



しかり方の基本は・・・

「正しい行動を教える」こと！

子どもが喧嘩して、他の子を叩いたらどうしますか？順番を守らない、人の物を取る、おもちゃを散らかす、言うことを聞かない・・・



子どもの自己中心的な行動に困るよね・・・



「自己主張」「自立心」が育っている証拠と
思って！



「わざと我が子が親をこまらせようとしている」と感じる時は！

○子どもが親の関りを困った行動で求めている



子どもは、褒める、認めるなどプラスの関りが満たされていない時、マイナスの関りでもいいから親の関りを求めてくる場合が多くあります。

○親の責任感がとても強い方



子どもの言動すべてが自分の責任と感じている。子どもが思う通りにならないと、子どもが自分に恥をかかせているような気がしたり、子どもにバカにされているような気がしてしまう。

子どもに合わせた関わり方

「言うことをきかない」ではない



伝わらない言い方をしている

言い方をかえないと

伝わる言い方を！！！！

子どもの行動にはすべて意味がある

何度言っても言うことをきかないのは、伝わっていないだけ

「甘やかす」と「甘えさせる」の違いを考える

○「甘やかす」＝「過保護」



子どもが自分でできる・やろうとしていることに、手を出す（過干渉）、「お菓子食べたい」「おもちゃ買って」など物質的な要求をそのまま受け入れるといったこと。

○「甘えさせる」＝「手助け」

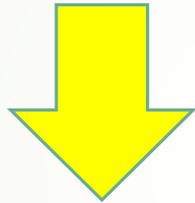


子どもがどうしてもできないことを手伝ってあげる。「抱っこして」「話を聞いて」など情緒的な欲求を受け止めてあげる。

子どもに合う適切な対応へ

「認めること」

「自信をつけさせること」

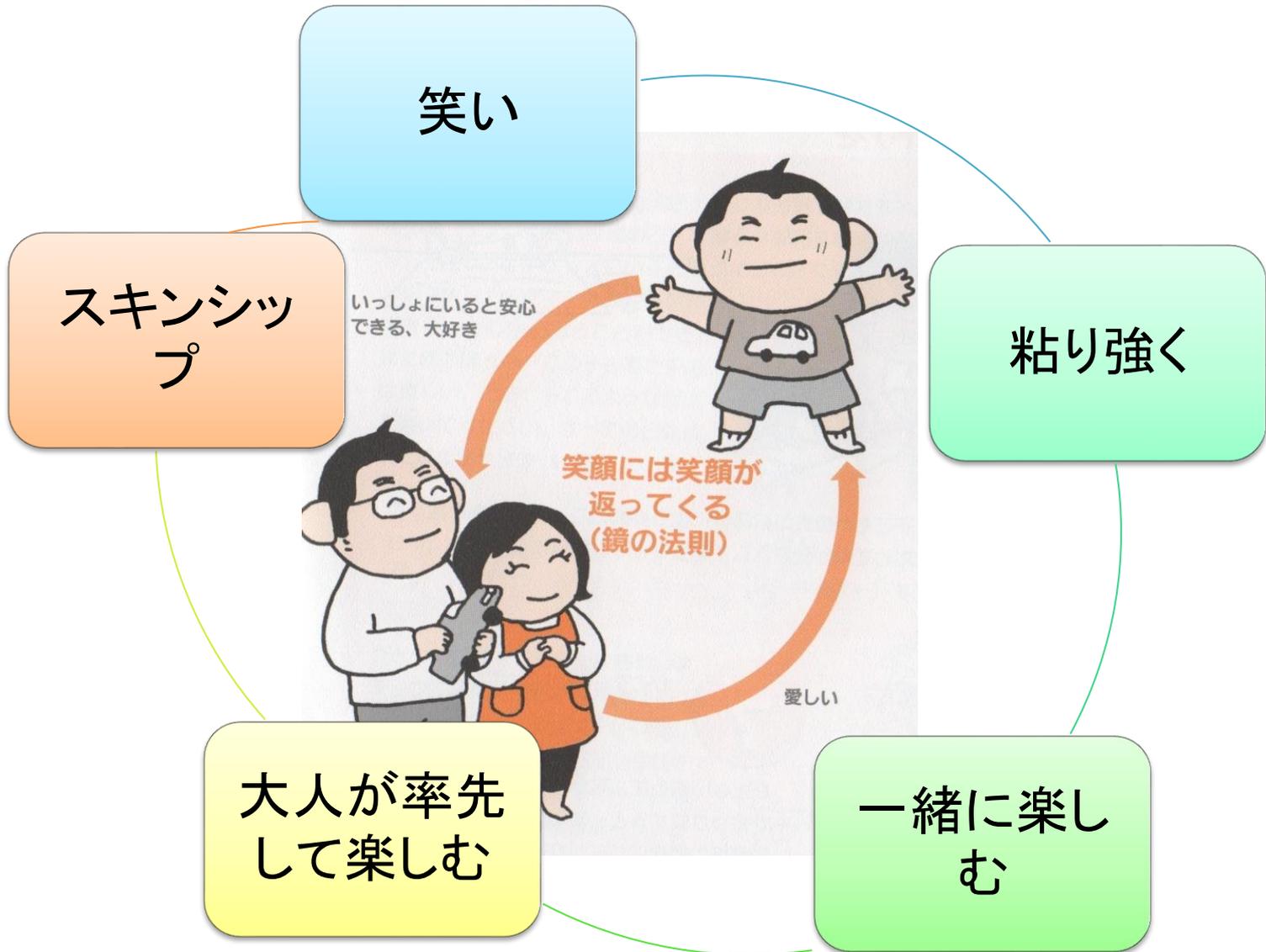


「子どもの笑顔を引き出す」

*鏡の法則

<笑顔には笑顔が返ってくる>

良い関係性を築くために



子どもに合わない不適切な関わりをするとどうなるか？

➤ 脳科学からの側面

- 完璧な大人はいません。
- 子どもはつまずき、失敗しながら大きくなっていきます。
- 脳が変形するほどの傷つきは、絶対に必要ありません。

➤ マルトリートメント（不適切な養育）

- 親が毎日必死で子育てをする中で、子どものためを思ってしていることが不適切な養育にあたる場合もあります。
- 目を向けるべきは不適切な行為の強弱ではなく、その時の子どものこころの状態です。

本当に必要なこと

健全な人格形成の保障

- ◆ 自分が苦手なことを知っていて
- ◆ 一人で出来るようになることではない
- ◆ そのことにうまく自分で対応できるために
- ◆ 何を使えば良いのか
- ◆ 誰に、どこに聞けばよいのかを知っていて、そのことが出来るように、上手な生き方を教えること。
- ◆ 自覚と工夫につきます